

17 長崎家収蔵の『折肱録』について

正橋 剛 二

高岡長崎家蔵書のうち『方意便蒙』（日本医史学会、平成五年、金沢市）『象山翁方集』（同六年、横浜市）に続き、今回は『折肱録』（縦一四×横一九・八センチ、墨付一三七丁、濃緑布表紙装幀写本）について述べる。

まず、本書の書名に関し、手もとの辞書には「三^{タビ}折^ル肱^ヲ」(一)何度も人の肱を折って初めて一人前の良医になれる。一説には(二)何度も自分の肱を折り治療して初めて良医になれる。経験を積重ねてはじめて老練になるとえ。九折。へ左伝・定公」とある。『春秋左氏伝』（竹内照夫訳）には定公十三年の條に齊の高彊の言葉として見えている。『廣文庫』（物集氏、第一六冊）には「臂を折りて良医となる」の項があり『医贖』^{シヨク}の記述として『王業知新録』『楚辞』等の出典、さらに『孔叢子』『書言故事』

『倭訓栞』『結託録』の例を挙げている。『大漢和辞典』

（諸橋氏第一巻）もほぼ同様である。総合すると前記(一)または(二)でよいのだが、一部には譬喩的に患者から手を引く、あるいは腕組みして、思慮工夫するという説もある。

当時の高岡ではよく膾炙されていた言葉で、天保一一年一二月長崎浩齋、松田丁夢により再興された神農講の席上で、高峰玄台は五言律詩の中にこの語を詠み込んでいるのを知ることができる。

大小又軒岐 尊崇万世師

漢和雖異域 今古豈殊規

精意依誰覓 臨機勿自欺

折肱同志士 応有大成期（圈点正橋）

本書は右の趣旨から長崎家で成立したもので、診療の間、長期にわたり書留められた備忘録の性格をもっている。序文はなく、次々と書き加えられ、その筆跡と内容から同家の三代、すなわち

第四代 蓬洲（明和二年—文政一二年）寿、萊福、玄周、

玄庭

第五代 浩齋（憲政一一年—元治元年）健、確然、康齋、

愿禎

第六代 正国（文政九年—明治七年）周、周蔵、言定
右の三人、主に前二者により書きつがれたと見られた。
年代的には蓬洲の最盛期文化七年に始まり、浩斎を経て、
孫の正国が成人した後、ほぼ幕末頃に終ると推定した。
内容を検討すると、

第一部 治験例（二七例）とその長期予後（四例）の記述

第二部 方書類（七処方集ほか）の収録

第三部 長崎家個人情報（「浩斎年譜」等）

第四部 その他雑記録

のように区分できるが、これは演者（正橋）が便宜上再編
を試みた区分で、本書が整然とこのような章だてになっ
ているわけではない。

第一部では長崎家の診療に対する姿勢と医療の水準を
知ることができる。右の二七例は本書の冒頭より第五四
丁までの間に随時記録され、文化六年より九年の間に一
五例がある。この頃浩斎はまだ若年で蓬洲によるものと
みた。だが、後年の『方意便蒙』の記述と類似していて、
その先駆をなすものとみられた。

第二部は本書紙数の最大部分を占める。見聞の都度記

録した処方のほか、(一)吉益十二律丸散方(二)東洞先生著述
薬徴五拾三品記主治、また(三)薬徴続編(四)医宗金鑑拔萃(五)
光明寺村妙寿寺聖潭子眼科治験方九十二首(六)高峰伝方
類(七)三法方典拔萃のように先人のまとめた処方集の筆
写がある。蓬洲の実父吉川唯右衛門は『寥山翁方集』を
編集したが、この博搜の精神は長崎家にも引きつがれて
いるとみられた。また一方では浩斎の見解の誤りを蓬洲
が訂正指導するという局面も散見される。

第三部はすでに寺畑氏、片桐氏により公表されている
のでここでは割愛する。

第四部は医学を離れて、洋菓子製法等に関するもので、
第六代正国の筆とみられた。

以上、口演にあたっては第一部を中心に発表したい。
なお、本書の全文（第三部を除く）は近く発刊される「実
学史研究」（末中哲夫編）に投稿中である。

（富山市・呉羽神経サナトリウム）